

Title	新しい時代、新しい大学、初心わするべからず
Author(s)	大木, 英夫
Citation	キリスト教と諸学 : 論集, Volume22, 2007.3 : 57-65
URL	http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/reps/modules/xoonips/detail.php?item_id=3237
Rights	



聖学院学術情報発信システム : SERVE

SEigakuin Repository for academic archiVE

新しい時代、新しい大学、初心わするべからず

大木 英夫

「ユネスコ高等教育世界宣言」が、第三ミレニアムを前に、二一世紀の高等教育の課題を一九九八年一〇月五日から九日までの会議で検討され、採択された。その中にこういう文言がある。

「国際連合憲章、人権に関する世界宣言、経済的、社会的小および文化的権利に関する国際規約、及び市民的小および政治的権利に関する国際規約の諸原則を想起し、……」

「教育は、人権、民主主義、持続可能な開発および平和のための基本的な柱であり、……」

「これに関連して、二一世紀を目前に控えて直面する問題の解決は、将来の社会の展望により、および教育一般、特に高等教育に割り当てられた役割により決定されることを信じ、新たなミレニアムの入口に立ち、平和な文化の価値と理想が広がり、その目的のために知的共同体が動員されることを確実にすることが高等教育機関の義務である……」

日本には依然として鎖国後遺症があり、世界的かつ世界史的視野でものを見ることができなくなっている。しかし、聖学院はそうであつてはならない。聖学院は、背景は世界的・世界史的だからである。その世界的・世界

史的な動きは、今日日本社会の各方面で感じられていることも事実である。「構造改革」とか「民営化」とか、それは世界的・世界史的な社会変動で時代遅れになった古い諸制度の調整である。その改革の要求は、台風のようというか津波のようというか、教育・研究の分野をも襲っている。近年国立大学がいわゆる独立行政法人化の風波に揉まれてきたことをわれわれは知っている。「横浜国大」はどういうなるのか。「横浜ドックウハウ大学」とでも言い換えるのか。そんな笑い話も聞かれた。都立大学が首都大学東京という奇妙な新名称をつけて登場した。そこにわれわれの総合研究所の助教授が「教授」として迎えられた。その改革の余波をいささか感じる機会があった。

この世界的・世界史的社会変動は、モダナイゼーションとかグローバルゼーションとか命名されている。日本のモダナイゼーションは一八五三年ペリー来航によつて始まった。明治維新は一八六七年、それから一四年後であった。「動」は「反動」を惹き起こす。明治維新の「文明開化」の「動」は「国粹保存」の「反動」と争った。明治維新は、断髪令でチヨンマゲを切り叩けば「文明開化」の音を立てた頭蓋骨の中には「国粹保存」が残つて、反動を企てた。そして出来上がったのが「和魂洋才」である。それは「富国強兵」策として政策化し、軍備は洋式、そして大和魂で究極の奮戦を試みたが、一九四五年破滅に終わった。

昨年は敗戦後六〇年であった。一九四六年制定の日本国憲法は、それを世界史的観点から見れば、決定的なデモクラタイゼーションの出来事であった。しかし、戦前からの遺制は克服されず、それに小泉首相は「構造改革」をもつて立ち向かった。小泉政治は功罪に議論の余地を残して今年終わる。それはヤヌスの二面性をもつていた。以前にわたしは、小泉氏は運転台に後ろ向きになり、座席の右側の人たちと話しながら運転しているようなものだと言ったことがある、その説明は国際的に不可解、その「不可解」を彼は「不可解」というから大変な混乱である。

しかし、世界はあたかも大水が堤防を決壊したかのようにモダナイゼーションがグローバルな動きとなつて押し

流し出した。一九八九年のベルリンの壁の崩壊である。この世界史の変動は、自称「進歩的」というマルクス主義の歴史哲学を破壊し、追い抜き、そして「知」の停滞を招いた。世界史の変動の動きとの間にズレが発生してきた。そのズレが、今日の大学の改革の要求となった。大学のズレはこの世界史的動向へとシンクロナイズさせることが要求されているのである。それは大学が社会変動に遅れないで、その動向に対して大学としての批判的かつ形成的役割を果たすためにも、それは避けられない課題なのである。

*

聖学院大学の設置は、一九八八年、ベルリンの壁の崩壊の前年、日本ではなお大学紛争のくすぶりが残っていた頃であった。その時、「なぜ今大学設置が必要であるのか」という問いを真剣に問うた。到達した結論は、「新しい時代には新しい大学は必要だ」ということであった。聖学院のミツシヨウ・スクールとしての最初の崇高な理念を大学レベルにおいて実現することが今こそ新しく企てられねばならない、その議論は、『聖学院大学の理念』という文書となった。

「新しい時代」とは何か。それはモダナイゼーション、グローバリゼーションという世界史の変動を捉えて言った言葉である。戦前は「近代の超克」という議論が流行した。それは所詮知的アナクロニズムの空論に終わった。最近「ポスト・モダン」という言葉が濫用気味に飛び交った。われわれはあえてそう言わない。そういう言葉では、あのインド洋に発生した津波を見誤るように、世界史の変動の津波を見誤って、被害をもたらすからである。

しかし、聖学院大学がその設立をもつてみずからの存在理由を提示したその思想は、先に引用した一九九八年のユネスコの高等教育世界宣言よりも早く、しかもまたその取り組みの仕方において違いがあるということをここで明らかにせねばならない。この宣言は「国際連合憲章、人権に関する世界宣言、経済的、社会的および文化的権利

に關する國際規約、及び市民的および政治的權利に關する國際規約の諸原則を想起」という、しかし、日本の場合はもつと深い認識と強い志向を必要とするからである。今日日本では、そのような「想起」すらなく、「和魂洋才」、ナショナルリズムを回復し、單なる技術的理性をもつて「ものづくり」のレベルで競争に打つて出ようとする。われわれは科学技術面の進歩の必要を否定しない。しかし、大学はもつと崇高な課題をもつことを眞剣に考える。ヨーロッパの大学の伝統を、現代の科学技術面の肥大化によつて失うべきではない。ユネスコの宣言にある「想起」も全くないテクニカル・リーズンだけの大学は、「大学」の名に値しない。第二次大戦後の文明の課題は、「ものづくり」以上に「人づくり」の課題がある。その課題の眞剣な自覚がなく、政府は依然として「ものづくり」を強調する。日本は戦艦大和を造つた。それは最大級の「ものづくり」であつた。われわれはその「最後」を見た。ブーメラン現象によつて、最近、半導体生産で、日本はアメリカと韓国に抜かれたという報道があつた。

聖学院大学は「人間」を凝視する。そこに現代の問題の根本を見る。なぜ「人間」に眼を向けるか。歴史の問題は人間の問題に帰一するからである。とりわけデモクラシーの成否は人間の問題に帰一するからである。歴史と人間、この課題を思うと、われわれは旧約聖書の中に深い洞察を見いだす。旧約聖書は創世記に始まる世界史とイスラエル民族の歴史をヨブ記や詩篇における人間の問題へと帰一せしめている。新約聖書では、イエス・キリストが「たとい人が全世界をもうけても、自分の命を損したら、何の得になるうか」(マタイ福音書一六・二六)という言葉を見いだされる。そして新約聖書は、旧約聖書を受けて、なぜ世界史の問題がイエス・キリストというただひとりに収斂すると見るかを教えているのである。世界史は、人間の実存問題に帰一する。歴史と実存との結節点がある。大学における研究と教育は、この結節点を捉えねばならない。

人間の問題の解決なしに歴史の問題の解決はない。マルクス主義のように歴史の問題の解決から人間の問題が自

動的に解決されると考えることはもはやできない。それはその不可能性は実験済みである。人間の問題の解決をおろそかにしたすべての歴史的努力は、カミュが第二次大戦後に「想起」したシジフォスの神話に終わるであろう。

このユネスコ文書が「二一世紀を目前に控えて直面する問題の解決は、将来の社会の展望により、および教育一般、特に高等教育に割り当てられた役割により決定されることを信じ、新たなミレニアムの入口に立ち、平和な文化の価値と理想が広がり、その目的のために知的共同体が動員されることを確実にすることが高等教育機関の義務である」ということはまことに立派な言葉である。しかし、それは美辞麗句であつてはならない。そのテストは、大学が世界史の深みにある問題とどう取り組むか、どう解決を生み出すかという問いにどう答えるかにかかるであろう。グローバルゼーションの世界における新しい大学の課題との取り組みの結果で分かるであろう。

日本国憲法の最高法規の条項に出ることば、ユネスコ文書の言う「人權」は、「過去幾多の試練に耐え」てきた、その試練とは単なる肯定ではない、否定的なものを越える力である。——最近小泉首相は、日清・日露の勝利を「想起」して日本を励ます発言をした。かつて日本は、日清・日露の「勝利」の誇張と陶醉によつてあの敗戦へ突進したのではないか。戦勝は、敗戦を参照しなければ、歴史から学ぶことを知らない。「知識は人を誇らせ、愛は人の徳を高める。もし人が、自分は何か知っているとと思うなら、その人は、知らなければならぬほどの事すら、まだ知っていない」(第一コリント書八・一二)。国連は第二次大戦後の戦勝国の連合体である。世界史の深い問題は、戦勝国の側からは見えないのではないか。そもそも聖書は、古代諸帝国の支配に苦しむ世界史的軋みの中から出てきた知恵である。

*

敗戦国日本は、「否定的なもの」の経験をもつた国である。自然には弁証法はないが、歴史にはある。歴史に取り

組む知恵は、否定的なものとの取り組みによって養われる。そしてそれが大学の課題となる。

今回アメリカに所用で行き、ある大学教授と話す機会があった。その教授は、ブッシュ政治を嫌っている人であった。その教授は、アメリカは南北戦争の決着をつけていないと語った。南部は敗北の意味を明確に捉えきれず、自由や人権という北部ヤンキーの理念を受け入れただけ、それは今の日本と同じだと言った。わたしは、これはなかなか洞察だと思った。

よく考えて見れば、今日の世界的デモクラタイゼーションは、第二次大戦後というよりは、南北戦争から始まったと言えるのではないか。アメリカ内部の激震から起こった津波だと言つてもよいと思う。一八六〇年にリンカーンが奴隷解放を公約として大統領に選出され、次の年一八六一年から一八六五年四月まで、南北血みどろの戦争をした。北部はグラント將軍の指揮のもとに勝利を得た。戦死者は南北合わせて六二万人、それはアメリカが第二次大戦以後今日までの戦死者の数よりも遙かに多いものであった。リンカーンは一八六五年暗殺された。グラント將軍は、一八六八〜一八七七年大統領となった。その後、海外旅行に出、一八七九年（明治一二年）日本にきた。最初イギリスに行き、そこでヴィクトリア女王の子ケンブリッジ侯爵の部隊を閲兵させられたとき、「わたしが二度と見たくない唯一のもの、それは軍隊の行進である」と述懐したという。日本に来て、ここでも近代化した日本軍の閲兵をさせられた。やがて日清戦争へと向かう日本の軍国主義のはしりを見た。彼は日清の平和を提言した。

世界史と取り組む人間の力は、たとえば戦争の悲惨をなめつくし、それでもなおその「否定性」を克服することによって獲得された力でなければならない。大学八号館のガルスト・ホールに名を残した宣教師「ガルスト」（一八五三年八月二三日生）は、一九七六年にウエストポイントを卒業、このグラント大統領から将校として任官を受けた人であった。このウエストポイントは武器を捨てて、宣教師となった。彼において「否定的なもの」の克服が

あつた。伊藤博文はこの人を「西洋はいまだかつてチャールズ・ガルストに勝る贈物を送つたことはない」と称賛したという。ミッシヨナリとなつて一二〇年前秋田に來た。ガルストには一種の日本改造論があつた。彼の農地改革の理想は、もうひとりのウエストポインターであるマッカーサーによつて敗戦後実現された。——わたしは、この講演を準備している一月二日の朝、アメリカABC放送で、中国派遣のあるジャーナリストは、中国での取り扱ひを経験して、ペンを捨てて海兵隊を志願し銃をとつたというニュースを流した。それは現実との取り組みの困難に直面した一つの決意であろう。わたしはこのことを否定はしない。なぜなら日本も軍事的に敗北しなければ、デモクラタイゼイションを受け入れることはなかつたからである。しかし、聖学院大学は、ガルストの道をとつて、将来の問題と取り組むことを選ぶのである。

ガルストの愛誦の聖書の言葉は、"Rightness exalteth nation." (小貫山信夫訳『チャールズ・E・ガルスト』二六九ページ)であつた。ちかごろの構造設計問題が出た。その建物の外面は素晴らしく見える、深く内面が駄目なのだ。「内面」とは何か。サンテクジュベリの言う「目に見えないもの」、それは、端的に言い換えれば、「倫理性」の問題であると言つてよい。デモクラシーとは「倫理性」を必要不可欠の条件とする政治社会体制である。その倫理性の欠落が、國際的信賴を得ることを不能にする。

グローバリゼーションは行く先どうなるか。教育とは未来形で考え、未来形で働く。未来への希望の業である。未来形成の作業である。どうして人類はグローバリゼーションの動向に希望をもつことができるか。ギリシャ神話のパンドーラの箱を開けた後に残つた「希望」は悪徳であつた。——さきほど読んでいただいた聖書の一節に「練達は希望を生み出す」という言葉があつた。新年になるごとに「希望」を語る声を聞く。しかし、ここで眼を開かねばならない。「練達」、それは「否定的なもの」(試練)を媒介として人間に出来てくる強さである。この「練達」

と云う言葉「character」(NSV) 或いは「strength of character」(The Twentieth Century NT) と訳される。デモクラシーは、人民全体にその「キャラクター」を要求する。日本語に「民度」という言葉がある。「人間度」が「民度」の基礎である。グローバルゼーションは、グローバルな民度の向上を前提とする。それがグローバルゼーションの過程に希望をつくり出すことになるのである。

要するに歴史は人間世界である。人間が新しい人類共同体形成のために練達していなければならない。キャラクターを具備しなければならない。その大課題と取り組むのが聖学院大学である。古い大学の後塵を拝して息切れしながら走るのではない。大学は教授と学生のコレギウムである。新しいコレギウム (collegium pietatis et scientiae)、集団としてのキャラクターが出来て行かねばならない。

「キャラクター」とは美德によって練達した人格である。中世の文化綜合は、人間論の基盤をもっていた。トマス・アクイナスは、ギリシャ的四つの枢要徳(勇氣・節制・知恵・正義)とキリスト教的三つの美德を結合した。この人間的基盤の形成が中世の文化綜合を果たす基礎となつた。今日、デモクラタイゼーションの可能性、グローバルゼーションの要請する世界的文化綜合は、人間と人間の共同体の形成の課題から切り離すことはできない。新しい大学はその「形成」による新しい文化綜合を目指す未来形である。その活動は、単なる知的技術的教育ではない、個人だけではない、社会全体の形成である。Edificatio というよりは aedificatio、edification、edify、つまり建設である。その課題が出てきた新しい時代には、それゆえ新しい大学が必要なのである。二一世紀の前半に聖学院大学は、日本のために未来を掴む、新しい大学というのは、この将来を掴んでいる大学である。人間と社会、人間と歴史、それをトータルかつラディカルに捉える力を養うのである。ガルストは遙か日本にきた。彼は短命であった。確かに、人生は短い、しかし「教育の仕事」(ars aedificatoris) は長い。神学用語を用いれば、エスカトロジカル

な長さである。だから、この仕事は何か超越の感覚 (pietas) が必要なのである。「超越」への憧れが必要なのである。「超越」に触れていなければできない仕事である。

ラインホールド・ニーバーの「冷静を求める祈り」の言葉と並んで有名なもうひとつの言葉を述べてこの講演を終わりたい。これは『アメリカ史のアイロニー』(二〇二頁)からの引用である。新しい時代と取り組む新しい大学、「超越」の感覚をもつ「聖学院大学」を導く言葉である。

「いかなる価値あることも、人生の時間の中でそれを完成することはできない。それゆえひとは希望によって救われねばならない。

いかにまことで美しく善きことであっても、目に見える歴史の現実のなかでそれを明白に実現することはできない。それゆえひとは信仰によって救われねばならない。

いかに有徳な者であっても、人のなすことはただひとりだけでは達成することはできない。それゆえにひとは愛によって救われるのである」。

聖学院大学三学部そして大学院に新しいもう一つの研究科ができて大学院三研究科となる。こうして新しい大学は新しい時代のために、三つの美德を「超越」への憧れに結び、ガルストが『My life is my message』と言ったような生き方をもって、「初心わするべからず」、新しい年にはいつて行きたいと思う。

(二〇〇六年一月六日 聖学院大学新年研修会 於大磯)